

入門通観

二 入 門

句讀點のうつてないことから、假りに入門と見た。その是非は別として、これを一束と見て取扱ふには、次のやうにならべて書いてみる位の親切がなければならぬ。

二・三 サイタ サイタ サク ラ ガ サイタ

- 四 コイ コイ シロ コイ
 五 ススメ ススメ ヘイタイ ススメ
 六 オヒサマ アカイ アサヒ ガ アカイ
 七 ヒノマル ノ ハタ バンザイ バンザイ
 八 トマレ トマレ ナ ノ ハナニ
 九 ハシレ ハシレ シロ カテ アカ カテ
 十 ココマデ オイデ ソロソロ オイデ
 十一 ハト ハト オミヤ ノ ヤネ カラ オリテ コイ

サクラ

かうしてみると、書かれてゐるのは「サクラ」「シヨ」「ヘイタイ」「オヒサマ（アサヒ）」「ヒノマルノハタ」「チフチフ」これは文の表面にはあらはれてゐない。次に「シヨ」「アカ」次は「アカンボ」これも文には見えない。次は「ハト」皆子供の心をどうするものばかりだ。書き現はし方を見ても、「サイタ」「ヨイ コイ」「ススメ」「アカイ アカイ」「バンザイ バンザイ」「トマレ トマレ」「ハシレ ハシレ」「オイデ オイデ」「オリテ コイ」いづれも強い呼びか、親しい呼びかけ——命令——である。それらのことを書いて読みとらせる位が、主な仕事であらう。

サクラ（二時間）

満開の桜にむかつた感じは、説明の出来ないものである。やまと民族の精神を象徴するやうな花だ。

教材 最初の「サイタ サイタ」は叫である。音のあまつた聲だ。「サクラ ガ サイタ サイタ」も單に事實を語るのみではなくて、うれしさはあふれてゐる。

教壇 まづ捕縄を見させるがよい。遠くに締める山、近くに常綠の山、その間に満開の桜の林、おのが頭上には二本の桜、なほ花をたづねる花見客なども考へさせたい。空の花瓶、花をめぐつて飛ぶ絵を見せる

着語

書寫

あぶや蜂のうなり、そよ吹く風の暖さもおもはせたい。
次には教師が二三回讀んで、聽きとらせるがよい。

「サイタ サイタ（きれいだね） サクラ ガ サイタ（おとうつくし）」

括弧の中に書きこんだのは、讀後の感を端的に、いひあらはしたものである。碧巻集や從容錄に、かうした言葉が挿入してあって、讀む者の心をしがと結晶させるやうに感じる。そんなことから思ひついて、數年前尋常小學國語讀本各課取扱の着眼點といふ書を著はした時から、各教材に通讀直後の感を所々に記入してみた。これを着語といつてゐる。全く禪僧のきびくした讀書振をうつしたものである。これを實際の教授を行つてみて、私はさう得意になつてゐる。この着語は、氣が乗らなければ、加へられるものではない。文をその意義に徹して読みとつた時のみ、おのづから逆ることばのやうに思ふ。人の着語をまねたり、口先でやつてみたりしたのでは、しつくりはまらない。着語する時は、大間の大切なものはない。うまくいくと、文の眞意義がすらーと浮び出す。児童の爲といふよりも、教師の修行だ。

次に書かせるがよい。「先生も黒板に書きますから、皆さんも書きなさいよ。……書けなくても泣くやありません」と一本鐵筆の釘をうつておくがよい。さて黒板にむかつて一々々々丹念に書いていくと、出來不出来は別問題として、全兒童も眞剣に書いていく。——こゝは秘傳だが、教師がそはした心ではない。教へる氣になつて、筆順だと、字形だと、姿勢だと、静肅にとか、くだらぬことを餘舌つちやいけない。歎の力でおしていく。かれこれいふから子供はつい泣きたくなれる。入學當初の兒童ほど書くことを好むものはない——書けた子が「書けました」といふのは最もわらう。

次に書かせるがよい。「先生も黒板に書きますから、皆さんも書きなさいよ。……書けなくても泣くやありません」と一本鐵筆の釘をうつておくがよい。さて黒板にむかつて一々々々丹念に書いていくと、出來不出来は別問題として、全兒童も眞剣に書いていく。——こゝは秘傳だが、教師がそはした心ではない。教へる氣になつて、筆順だと、字形だと、姿勢だと、静肅にとか、くだらぬことを餘舌つちやいけない。歎の力でおしていく。かれこれいふから子供はつい泣きたくなれる。入學當初の兒童ほど書くことを好むものはない——書けた子が「書けました」といふのは最もわらう。

るい。全級の兒童をいらだたせる。爲すがまゝにさせておいて見給へ、子供ほどおとなしいものはない。

次の仕事に移る場合、鉛筆をおかせる時には、一人残らずおかせなければならぬ。仕事のかはつた場合、前の仕事に執着してゐるのは、自ら劣等に落ちて行く兒だ。仕事のうつりかはるにつれて、前の仕事をうちきつて、仕事と共に移り行くのは、學級訓練の重要な一事項だ。

書いたらそれを讀ませるのが當然の順序だ。こゝに經供な讀、節のついた讀、力のない讀など様々ある。それ等は先生のやうにと注意して、範讀によつて矯正しなければならぬ。矯正するにはまづいといつて責めずに、先生のやうにと率ゐるがよい。何といつても、神の子のやうな尋一の兒童を育てるには、行により、範を示すことが肝要だ。實行の前には、誰でもその感化をうけずにはをらぬ。行なるかな、行なるかなだ。この大道坦々たる教育が、我が初等教育界には今まで行はれずになつた。讀本改訂のこの機會こそ、教法について深く反省すべき時だ。兒童を率ゐる秘奧はまづ漢塵石のやうな教師の重みが肝要だ。

讀ませるには早くから指默讀になれさせるがよい。指默讀とは教師が板書の文字をさして、兒童にはこれを默讀させるのである。指默讀をさせる練の先には、教師の理想の讀がいつもついてゐなければならない。指しながら、兒童の方を一目でも見たいやうな、意識に割け目があつては、到底うまくいきものではない。教師自身が眞剣に讀む讀みを、練の先にあらはす心掛がなくてはならぬ。指默讀が終つたら、指齊音讀に移るがよい。この際には練の先で、コツ～と軽く黒板をうつ音が拍子となって、教師の思ふまゝの讀みを、兒童にさせることが出来る。事は極めて玲瓈なやうだが、この一事が

讀み

練重要な訓

指默讀

挿繪と綴

級の読みを伸展させることはどれほどだか知れぬ。因にいふ、鞭は一尺一二寸が手ごろだ。鞭の先が竹の節になつてて、黒板をうつと、さえた音が強くも弱くも出るのがよい。鞭の鞭や、先のさけてゐる鞭は、殆ど鞭の要となさない。低中學年の教室で、鞭の備へない教室は、平素の弛んだ教授が思はれる。或いは、「鞭は何年位したら振れますか」と。私はこれに答へて、「私は四年間一年生を担任したたまものです」といつた。鞭のたしかに振れる教師は、まさに一人前だ、子供の讀聲のあとから、文字を指すやうな「マ」な鞭はよしたがよい。鞭は讀聲の一步先を指していくものだ。それが中々に修行を要する事だ。

読みが終つたら、次のやうな問にうつるがよい。

- 意義についての問
- この中で——板書をさして——皆さんの「一番好きだとと思ふのはどれ?」(この間で児童の讀取りであるものがわかる。答へば、「これがよい」これがよいとばなどきめではない)
 - うれしさうな所は何處? (さけびの「サイタサイタ」に来るか。「サクラガサイタ」の事象だとも喜んで来るか。どちらに来てもよいが、それは形象を讀む端緒だ)
 - さいたといふが、さかない前にはどんなに待つてあた事だらう。(こゝに時間が目覺める。何時喫くが、待つ心。花を見つけた暮。さいたくは満開の満悦)
 - さくらの花ばかり見てゐる様だ。(他の花は目にかかるらしい。その心が「ガ」のてなに見え
 - 言ひよじね。(ナナナナとさが上に四つ。タタラタと響の似たのが下に四つ。サイタサイタが三つある)
- 繰返されてゐるのだもの)

何だかだと出たら日の鑑賞話よりも、かうした問——發見さすもの、誘導するものによつて、形象を讀む眼は開ける。ことばの奥にこゝろを讀む目が開けたら、文字による國語教育はひとりでに伸展する。

因に挿繪を見させる際の重要な問——誘導的——を二三記してみよう。

- 水色の遠い山は?(離んでゐる)
- 近い山に生えてゐる木は?(松か杉か櫻か桜か——児童の知つてゐる常綠樹をいはせる)
- 山の麓の櫻はうつくしいね!(うす紅い葉のやうだ。うす紅い雪のやうだ)
- 花の林の下には誰があるだらう?(花見の人々。お遊戯さう)
- 二本の櫻の木の下には? (サイタサイタと喜んでゐる人——作者など小ませたことをいはせてはな
- ふだ)
- この花の一三日前は?(あらほらさうしてただらう)
- この花の一三日後は?(あらへちるだらう。風が吹いたら花吹雪)

挿繪は本文以外のことを多く載してゐる。文字の自由がきゝ出したら、それを綴らせるのが、やがて本文を確實に習得せざることになる。綴方で進めて行く假名教授とは、これをおいふのだ。

師に笑はれるかも知らぬが、「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」を叙述・表現・象徴の三機構でながめてみよう。變だつたら同志諸兄姉も教へて下さい。師もまた教へて下さい。印刷面即ち文言をたどつて、櫻花滿開の挿繪のやうな姿を思ひ浮べさせるのが、叙述的であらう。どのことは

やまと民族と櫻

二時間目

の一世一代

に嬉しさがこもつてゐるか、その喜の如何ばかりであるか想像させるのが、表現的機構であらう。「タ」とあるに、待ちに待つた人の心、「ガ」とあるに、櫻の花ばかりが目についてゐること、かく櫻を賞観することが大和民族の心の姿であることに言及して、はじめて象徴的機構とはいはれるのであるまい。

二時間目に、読みや書寫の復習を終つたら

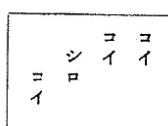
- 日本人の「一番好きな花は?」(さくら)
- なぜ好きなのだらう。(さつと笑いで、さつと散る。色の淡いのもその一つ)

この間を忘れてはならぬ。この間で國心は培養されるのだ。日本人は櫻と離れては到底快き生活をすることは出来ない。新領土のところにいつてみても、櫻の移植に腐心してゐる。現に朝鮮の咸鏡北道満津の公園では、内地から手頃な櫻樹を移植してゐるが、それが梢からかけて灌木のやうになると、三四五年毎に植えかへてゐる。大和民族の櫻に對する執着の程が察せられる。宜なり、これを國花と呼ぶこと。年々の國花によつて、國心の清めらるゝこと、それ幾何ぞや。

同志青山廣志君を煩はして、「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」の、私の精一ぱいの取扱を筆録してもらひたいと思ふが、これは私が入學當初から、一年生に接して、擔任先生とかはらぬ親しさを見童からうけなければならぬ。今年は到底不可能だが、在京同志の誰かが尋一の擔任にまはつたら、我も一世二代、一年生最初の國語教育を筆録してもらひて、之を永久に傳へたいと思ふ。

シロ (二時間)

シロ



犬は児童にとって最も親しみの深い動物である。それが讀本の一の卷の第一座をかち得た所以。「サクラ」にくらべると、簡単だ。蓋し「サクラ」は複雜でも、國花なるが故に、巻頭を飾つたものと思ふ。

これは綴者の心づかひのあるところだ。

教材 「コイ コイ」は呼ぶ聲だ。軽い。遠くに愛犬「シロ」を見つけての聲であります。「シロ」とその名を呼んだところに、親愛の情があふれてゐる。最後の「コイ」は命令を見るがよい。この文は呼ばれた「シロ」からも考へさす要がある「コイ」と呼聲をきて、「シロ」は一散にかけて來たのだ。途中「シロ」と我

が名を呼ばれ、「コイ」と力のこもった聲で命令されて、いそいでやつとこゝに來たのだ。小主人の親愛、「シロ」の從順、我あるがために彼あり、彼あるがために我ありといふ姿だ。聲調のとつてゐるのはサクラと同じ。

教壇 まづ挿繪の觀察からひる。地色の黄はよいお天氣をあらはすもの、小主人親愛の情は、その顔に、左右の手に、否からだ全體に溢れてゐる。「シロ」の小主人をなつかしむ心は、その姿勢全體に讀むことは出来るが、耳と鼻の先に、第二の命令をまつ緊張感が見える。もし許されるれば、飛びかゝつて、小主人の顔を一なめなめたいといふ希望が、前の右足にかすかに見えてゐる。次に教師が